

奉使日本紀行
七之九

特別
ル 2
3138
3





奉使日本紀行

第七篇

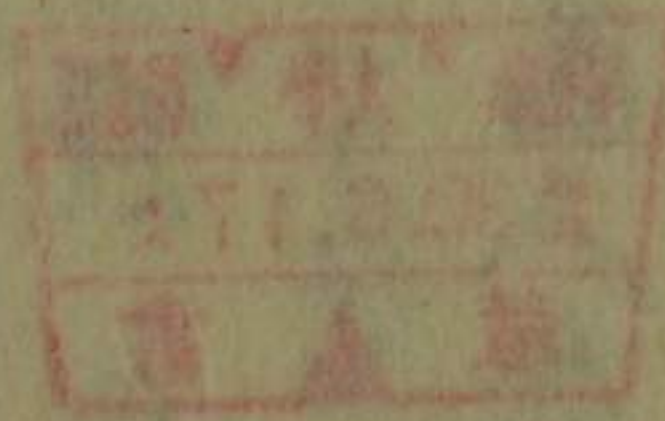
第八篇

第九篇

北
教
言
小
誌

旁
搜

卷
第
廿
五



門 2
號 3138
卷 3

奉使日本紀行

早稲田大學圖書館
昭和30.6.17
藏書

奉使日本紀行

第七篇 ニカイノ島逗留

船の碇をとりすと、真の船首の高人我船を四面に
窺ふ。椰子フロードフリユクテン ハナ子の樹果を賣んと
求む我等彼は交易する古き錢の四五に切らる
以てす此錢は通してコンスタドを以て用ひる為備へ
たる椰子の一筆フロードフリユクハ三四圓を以て錢の
如くに皆の弁の類は彼は最望む所とすは錢の

一邦を彼より遠くは彼より喜ぶ小兒の状の如く言ふ多に
笑てそを喜ぶを恥ます之彼も甚望を以て自分誇りて
此を奉て其他の人は皆驚く亦す其意の如く此を
寶とて珍むるの事も稀有の仕合ありとするべしと
ロベルツの言ふ彼地に居七年の月には二度西里利
加の商船の来きありて已なりと

予も思て予は此は極の少くして之を珍むるは
余の如くもあつされし得難しといふ故に此も

諸食物を買入んと欲せしは此は着するると
其の船中此人も令て敢て土人の珍異の品を交
易する事を極めて糧食の品を買入むとて
リイテナントロムベルグとドクトルエスベルグと故以て
此地のその交易の事を指揮せしめ主として糧食と
衣履の物を買入むを極めて椰子の類は多く
買入し其の極の珍奇を難きを志すまじ
あつし其の禁令を免して人として自由なり

此所の珍しき品を替取む

書の時島主自分其従者を従へて船を来り其

名をタベガケツテノウエーと云ふ其貌壯大して首

筋方く四十五歳と云ふと見え色強くと

思ふ頭髮切たると見えは是島の主なりとも

其従者少くも差別なくも由品チシヤゴ

を纏り纏ふサトイフ 常の如き物の名此

解く全く裸なり予彼を棚頂に坐し彼は小刀

と赤布を腰に纏ひ付し其後者船ものい多く此

主の親属なり由りて此等も少くは知りものを

與ふた口ルツ侍より之を以て予を制し多く與ふ

るを以て益なりと告て云此等の人島主たりとも少くも

報禮とする事い知らばなす予島主として我

船の大小も並大砲の數多ありを見たり且彼は

喻して云我此を以て此島人を成すと云ふなり

鐵

待も島人の命して我を敵するに我あきむへき
事とお予し初め此島もサドイク島及ケセルシカプ
島の主のめき物なりとてあき其如くあきさる
ある彼船板の上より其船小置さる伯西見産
小野島を見て大に驚き其船暫のる其側まで泳
め居らば予彼之を救む意を察して其一筆
を彼に贈りてへにロベルツと其船を移し物と
思て彼に贈りしるをいふすて其日其物とて

極一頭を我方に送り越しあり

日既傾きたるは船は東の浦男老の傍返りに
衆多の婦女の船の近きは後居す此等は既に五時
あり船の周囲は遊き回りあり其女子は種と此子
術をあらして船を招きよといふ言をホーぬ是は彼男子
有る容貌も彼女等小船より上ることを許し其氣色
明るを以て必我船より来んと欲してかくそをさる
也然も我船上の諸事に於て婦女の手を借り

すして事足しり予は予即ち言を却て凡為
主の親春の外ハ男子も女子も船中亦しむるが
たといふやに既に黄昏と成り彼女等歌き終て
船より外りのもと頻りに泣き予も思慮して終て
之を許したるに予初め此等の女を船中招く
我船中ハ微毒を傳流す此必有と察せしむる
云此地干合とて微毒の患ありと知し予外に船
中者の為ハ後谷ノロキを用て之を許しとて然とも西日

限て後ハ我此に逗留中再び婦女を船中招く
を禁めぬ然も尔後ハ女たハ向來多夕に此の船の
近くハ遊き集りて去らば終るハ彼等の頭の
上ハ鳥鏡と放りて之を懼れ去らぬ此
地の婦女の如く淫行を恥さるハ其性の醜潔放浪
る已に開すも非是ハ其夫と知り又と其の情
義を去らす是婦女をして強て淫を臺て殘器等
此物を會り束のむと其儀にするあり予嘗て元

ふふ一男子とて娘とらんゆふと申すに二氣許の女
子を船の傍に遊泳せしめ之を以て淫戯と求めむ
予驚きさきさきあふ山兒の甚習つとて一媚妓の風情
して今娘を求のたふ年だけし者の如く振舞はるに
字を尋へし又其不幸を憐むあふくし一介を彼ら
容止は合く小兒すして笑嬉しあふもかゝる憂を
此有難哉意を哀しむる振舞もあふきりし予實
に字宙間まわりの如き不あれ生を切らぬものあふ

嘆息したる

次日六時島人百餘と船に乗る椰子等の物を賣
る此島の島の諸眷属来て船を見せしを既し
七時に船に乗る予彼等を棚頂に入し
各々贈物を分配しぬ棚頂中より其畫像
を掛置し其後彼等目を放さず見せし物あり振
也一が頸髪を縮めあるを羨しし其次みし一破子
鏡も彼等に見せし物の一ツ也其時鏡の裏を求

めんと何れも影の移るを知んともひも悪く也
大明の鏡の彼等此全體をうつし一もいむ物し
し一皆其前よりきて鏡に發し其年より治ま自
ら已る形體をうつし一も其悦する其後我棚頂子
訪来る者いそく大鏡のふり立居て去るに當り此
あり時を費し一も其之は困るをあら也
後より平陸より島主を報れ一且好むを尋ねむ
へき為ぬは予船に不在の間に島人を船に入ら

さら印として布を旗を建て一砲を撃ぬかくすれ
船は夕ボ 次篇より詳なり甲法 舟をかくあたる物とは
徳の交易事も直ま止めらる也かくて船より舟も来
人可然とも船の周囲より行く者も漸く遠ざかりぬ
十時に予陸に赴き予使の向き予備日大幸を伴ひ
既より島主と和睦ある事なりし一行世も平和哉
主より但路の上陸より島主の住居を訪ふなりし隨ち
武器を備へ予の借とる六人此外別より小舟一艘成

具一櫓子の階に矢ト一の中銃と銃と供一流官司も
く武器を常し諸厄利五人と拂部五人を通洞と
して上陸するに濱には土人騎、集り見物す陸よ
上り歩むは、大暑熱堪難かりし彼土人の君羊袋の中
には島主も其眷屬も在り共土人等自致の謹
こころ能く見えたり我等水をおの儀、不甚良性
なりは丈す、島主の家より五、五歩許りして
島主の伯父即其眷屬ある處にありて彼

見る彼を七十の老翁形也、其儀健康を眼彩
爽やかに勇壯の男と見え其壯年の、強將あり、我等
一眼子剣を被りたり、とて今も其處に編帯を着きて
彼手子長き棒を持て我等に後、家多此老を止め
むとす、為す、と然る、さや、も為さる、之、老翁等と
手は、とて、予を、及、す、一、の、長、き、家、の、中、に、行、此、邊、島
主の母及諸眷親の居處より、彼等、我を、見、て、又、か
其、間、を、越、し、と、島、主、子、を、さ、り、島、主、其、儀、心、意、の、扱、を、し

我等々未訪を収ひ此處の島主の住處と見え島主の
夕一ホなきハ其下輩の者共ハ此月三日入らば備此處を
公事の高島の婦女等の中央に居て人々習ふ予々手を取
り衣服及其總帽物を見て活き其手と放多し
此諸婦女の容止も予々彼等より厚意の如く赤と白
風情有り予々因り彼等より指環小刀鉄刀等の細瑣
此品を贈りぬ然る彼等其物物を喜ぶ予々唯我等
と親しく相見えも収ふ候子也島主の女子二十餘年

髪ハ甚しく美しく歐邏巴人より耻する容止も見え黄色
此衣と云ふ一頭ハ黒髪を飾と云ふ椰子此油を
塗る但總體ハ黄色の衣を掩て唯手元かしを

〜〜〜あり〜〜

前の家まで我等暫く休息とて後島主又我等と
伴ひ十五歩許離れし一室より此處は島主の親
眷自來居る處也 次局ハ島主の家
此構築を詳す 其交りて我等より食料
食す所も交り薦を延敷て我等此坐より椰子

次りバナ子に水と借し彼合仕の者在我等の
傍に居り扇し冷しぬめかく我等を食するに彼の方
には甚く在りする事ありと申す時許我等甚く食代
受て支より彼等を相辞して別と返り小島と其春
父も甚く我等を送りて初に相見し處より是より多
く三人舟に我等を围绕し我等より後へ入り従者
三人克武器を帯しと警固し川の正午に船を返りぬ
船は返ると直に空桶と小舟を載て舟を汲りぬ

多し三時を過て水を取来りぬ此水と汲入りし土人
甚く能く我等の力を取しと助勢し水桶を
取て水を汲き暑熱の中を扇を以て働きたるは日々
水を汲りし我船支の辛勞を省き日々小舟を二
四回つて往來せりぬ食し土人の力より事を減せり也
土人の勞に報する一回は彼古鏡 五日許來りし土人
在遣りし事あり也
我等力を費し一船を買入むと云ふとも三日の内唯二

頭を待是ハ、鰯の返礼と一又ハ芥子粉を
る色なり此も在ても海上に在ると同じく新鮮の食に
く唯椰子を以て生鮮とするの外ハ、魚を塩漬を用じ
也但椰子ハ船中ハ固く用じ難し各處にて之は飽む
予五月十日の夕は海上に三橋の大船を有るの海を
うり予此船は子ワ船と云ふと云ふ直に小船ハ一舟を
せ業肉とて此港より行くなりと違ふるに子ワ船ハ
海上遠くよりありて其小船ハ彼を遙く見せ返りぬ是

子ワ船を待是ハ、鰯の返礼と一又ハ芥子粉を
る色なり此も在ても海上に在ると同じく新鮮の食に
く唯椰子を以て生鮮とするの外ハ、魚を塩漬を用じ
也但椰子ハ船中ハ固く用じ難し各處にて之は飽む
予五月十日の夕は海上に三橋の大船を有るの海を
うり予此船は子ワ船と云ふと云ふ直に小船ハ一舟を
せ業肉とて此港より行くなりと違ふるに子ワ船ハ
海上遠くよりありて其小船ハ彼を遙く見せ返りぬ是
子ワ船を待是ハ、鰯の返礼と一又ハ芥子粉を
る色なり此も在ても海上に在ると同じく新鮮の食に
く唯椰子を以て生鮮とするの外ハ、魚を塩漬を用じ
也但椰子ハ船中ハ固く用じ難し各處にて之は飽む
予五月十日の夕は海上に三橋の大船を有るの海を
うり予此船は子ワ船と云ふと云ふ直に小船ハ一舟を
せ業肉とて此港より行くなりと違ふるに子ワ船ハ
海上遠くよりありて其小船ハ彼を遙く見せ返りぬ是

一者より注進一其小船も陸まで既よたき所を幸して
所進返りたりと陸まで加騷亂す中よと語厄利
亜人ブルツ一人土人を制し止むと云ふ多勢對し
彼も甚危き也と其小船より往り一月より告ぐる所
之を聞いて何れある其騷亂を起したる也心持す予只今
少あまを我船を控せし島主も僅よ此時あまは
我船より居り船の中へ船主も在り外も怪き氣色は
我より給りし物を受けて悦ぶるなり且も彼り

香水をよへて鬘を剃めたる殊の外よ喜ひしこと
思ひし事直よ我船より返りて我船中よ島主を密
ちむらりもありやと尋れども然る事も好く疑く島主
此仰りて此海法をたしむる也然るも是も他よはる事
よ於て控^疑は拂商察人我等と親むる諸厄利亜
人の如くおらば彼之を妬みたる謀を謀て彼を利を
得んと計るもの然るんと察せしに果して彼より起りて
事と見えし其事始午時よ我等食卓よ在

時我船の高島の一月に告げ、島主陸より僅
王時を過て彼又拂郎人として別、豚を引く一人我
付ひ船よりとる之を中十分時又船板上より
豚を牽たる者、既に船より引返して往く是は彼
直に鸚鵡を與へりし故ことなり大に驚か島主
後彼豚を牽く者、其の氣味、若く彼を呼
返り、呉と云ふ、彼者、島主の命も引入けて速陸
に向て漕返り、多きは島主の一従者我船より來り

居者忽海中より、彼小舟を過て遊き、ゆきぬ、此時
拂郎人、うづ信、在て告て、彼遊もの、彼者を呼
返り、小往り、也、然も、後、同を、是、拂郎人の、何、計
よ、そ、彼、遊、者、を、し、陸、に、往、て、土、人、等、小、告、え、し、む、ら
ハ、我、船、を、島、主、を、獲、り、執、り、置、む、と、す、る、を、速、に、土、人、に
告、り、故、え、と、欺、き、せ、り、た、り、也、と、此、日、中、を、土、人、賭、動、す、也
拂郎人が、何、計、を、以、て、島、主、を、患、あり、者、の、如、思、を、見
と、り、し、もの、こ、ら、拂郎人の、我、者、を、害、ある、の、念、を、起

そを為るといふは殊文の意はとめず小事といふ
るはたうかくて島主我船に留り居ると暫く計して
急とけしと云ふに陸に返りたるは彼島主を我船に繋
くと云ふは陸に在るに於ては衆人皆武器を
帯りて發動し子口船の使船其發動の意を承
りて海陸より遁れ去りぬ然る島主既陸に返りし
ハ土人等も島主を陸に去るを見て方ハあ堵の思を
せしは遂とも島主も此海法を同じ拂即衆人は欺き

驚され我等を恐る意なきは非ず是に於ては次日
陸より島主を訪ひ我等に彼不對して敵す心は
き茂能く一日島主の弟は若輩を率てて来て云は
亞墨利加船の如く島主の親族を船に賣と執る意を
置て我為す也と云ふ答て云は方より我等に御親
交の間を我等に決て方ハ我等より悩をかす事ハ
何すといふを申明せぬ

注此亞墨利加人今より月前此に來りたりと

次朝八時にリジャンスコイを伴ひ我隊は趣きけるか二千
人の兵卒を具し我等も共二千今て武器を帯し
二艘の使船名タライイバ石火矢の名此百二十八銃丸を装
者二挺免を載せ二人の隊首ふ十人の卒を引率ひ
従しめお彼土人等我敵討きは全島を歩挫し之
子勢を見ぬ借我等既演進に著きし渡をよ
一人の土人もいへ元よりお我海濱處に小火元元
たつた船よ来ては我船に椰子を賣る者あり

竹りかち椰子を賣るは我等志し油河をあるきす真
島主の位前海濱より諸厄利亞里一里計谷
の山に向て行に其道に椰子ブロードラック上マイ
樹の林ありて其下は草生し人の膝よりひおれを好く
終り一條の大沼あり又後を山を限り居
好景此地盡く奇麗なる處ありに椰樹石
トフリヤト樹等の多木七八十丈の生繁り處に陸
起の地ありて其間を従横り山より流る小川の水疾く

流あり大瀑布をぬす可も阿り漸く急崖の位不
よ近くタロルテル蔬のムルベシイン果の名此園業白き木此
種として園玉甚く災番ニ見ゆ

注此種は白樹とニカイウ人いふと名樹を我とし

多色白く幹

我等かく僻遠の地異情の土人接すも此好景を觀
て暫旅中の憂を散す思をなかりかくて急崖
の其位変より救百歩あて我等を迎へ甚悦ひ我

等をれし又より位取入るよ彼の親眷集めてお歡
ひ者我等より錦を物とけて厚く悦ばるる松子之
事此村より島主の間で云かく睦する互の歡あるに何
う故に傳り北に沙汰を起し血を流るる危きをれせん
とする事戦あるも汝り利ありとする事ありとせんやと
島主答云我の園より公等が我等を害する事有とせさ
とて又彼拂良桑人等が告を胸を送りさる付り我を預
りて解き事あるとすと云聞くと云んは是は我を拂良桑

人の儀行能を怪し知りぬる島屋及諸親眷は贈物
を多く与へ島屋をして尔後我等子^弟敵するを欲し和親
を成しきと仰かたむ

我等島屋の室を暫休し椰子乳を飲まず只
川と薬用としてモライ^{臺所}とんを其前に島屋は子
に逢む此女は島屋の家の諸兄と同く今此を神の
如くする者も其室は一更此別の攝へあつて此女は
其母及親屬の外に入居かた^{此とクボ}あふ此女と
注す

すも也其取を多し島屋は弱る八月十月許の小児を
抱きたり予傍人子見て小児は母は乳を吞事幾許
此有るやと人答云大抵母其乳は乳するは小児産
出すると其子女を母^難其他の室は携行て之を
養子乳を以て葉實及生魚を以て養ふありと然も
ニユカイワ人^從形大^一と強健なるなり
モライに往泳子諸種泉ありモライは一高山上に太陽
満る天頂に在り我等甚辛苦して山を登り此

は深井中より一室甚多櫃を我七其櫃中、屍の天頂と
僅に隙あり其周圍に本像あり人形子像と云
甚拙き彫物之其像一本の櫃ありて柳系及木像
を掲て、白く兄内我等此櫃何を表するそと同し人
成妻しく答へて唯此を夕ボ知ると云モライ此近に一家
信の住あり此モライは彼に属する者なりと聞て

自らモライありロベルも高との姻属と云は已らモライあり
と然亦モライも多々深く内地の山に在我等唯海陸

より遠かきるをより見らるなり

ドクテルテレシウス彼モライを圖寫し我等も其や柳子
返ふんと欲すふ我等も甚動を新、今ロベルカ家
を訪ふと止むへくは、今彼ら等も其家の一室
椰樹井中を在て一側は小川又一側は礁を其
中央に泉あり我等も其の周圍を繞りて小川の
濱あり一礁上椰樹の蔭を休息し、今其熱中より
歩あり、今其、然も傍に椰樹を二十許の土人働

椰子の核^核を齧り椰子の乳を齧り椰子の湯を齧り甚清
 爽と云ふ^ル此婦人十八歳なり少女にて其容も少
 土人の風と聲^聲歐邏巴風と云ひて髪も椰子油を塗
 らずあり椰子油の甚光澤あれども久遠き香氣有
 て髪を塗て好と云ふ也
 夕一時に我等船を返り^返る事今日島を傍る事
 あり土人等を知り^知たりと云え此の如く漁船も多

く土人等出居る我船を返を待て又あの如衆人來て
 土物と交易せり
 五月十日よりリウイテナントローウエニステルニを去てニウカイ
 の北南渡及タイヨエアー湾の西側を見分ち^見たり
 彼クイヨホアー湾より三里を去て一の港を見出
 たり昔^昔此日申て五月十五日より甲比丹リニコンスコイ
 リウイテナントローウエニステルニ及ランクストルフと
 子ワの一司を伴ひ小舟二艘して其を^其往て之を

見んと欲す予そ取らば食糧の入用有んとの備を
外一又諸交易此品を予に贈饋の物とも推し行て一時
行の後朝十時其海灣に着一其灣口の深^深二十
尋底の砂とケイと文田と灣口の西側は直に從其時
つ礁多く立て禿きとも好形勢あり灣内の裏側
は一曲灣あり礁石を散布し蔭々如西面は全く開
き急浪甚大なり此多礁の灣北西隅を過ると東の
方より打開く好港あり極て好き舟繋りと云る其方

郷は北東と南西すと長二百尋幅百尋あり其地
の終りは平なる沙濱あり其後の方より青き系有諸^諸危
利^利世國の好青野は比へ一又較ては山より流る清泉水の
濱に流連出るあり後の縁野に流る此即灣の内は清
水ありて一所垢僅はまき谷中も流るあり其谷を土人
シケキユカと名をよそよと一の渚を命じて夫より灣中に流
る然も此灣の風を岸際を現し其濱渚の浪
は高きを難とす但予は考ふは滿潮は大ありさる

船を彼浦まで系入る。此より水を汲むは甚容易
ありて人船を懸浪の間は碇して土人あはれよく甚僅然
直りて水桶を満しむ。此を以て行此を懸浪の中は
遊手搬へ也

此港は地力ありて圍り大風も其も僅し過深するは
我船を修葺せんとするは此港を最好す其東濱は
五丁守許は濱海の水十尺或十二尺より五丁守十丁
此海よりある故に船の荷を卸すも容易なるべく又修葺

を要せぬ船も此港也。此港を好するは此港の
椰子バナナ子シロトフリユクナンを夥しくあり但血食類は
タイヨホリア此港より之と見る又此港は航海者の為なるは
大なる利ありとす其故に陸より百丁守の雜貨も島主及土人
此住する船の夫砲間の處より所より土人の方より龍宮が
るを割するに足るべし是故に此港を以てタイヨホリア此港半
里の隔ありとも使船を陸より每に警固の兵を備へる
と要する且タイヨホリア此港は総て泥沼と大石とて良地氣

を切んと欲するは深く陸に入るあるされは能く見とす
其地方に旅館を置けき好く測量所を建へきも
懸崖を器と換す可也然るも新港の之は返り流に近く
緑野ありて測量所も旅館も好き處より流の急なる
シケキニア谷は最好の消遙場とす右土人より港遊覧
と名船を近く碇する時はシゲキニア北路の緑野の方より北濱
の礁地の方より山の方より見所をす唯此
港は不足とする其港口狭く最狭の所は只百二十尋

何れに保港口狭くといふ船の爲に危かる港の十五尋
城二十尋此深も亮風を入流するに直に碇を投す
事安しタヨホア湾をハ船の出入根碇を用ふ
根碇は河式港に船を出入すに投碇を小船にて
持りて之を投し次に碇綱を繋ぎ圍ひ之を揚る
よは船の轆轤を巻取也
土人此港に別な名を設け唯其住居の谷を名けてシケキニア
とする而已耳航海の勅の巻として此をホルト子シテツアゴ

川と名く此港は南緯^緯八度五十七分 西経百三十九度
四十二分十五秒とす

タヨホア地方島主の住處並にコルツ七住處の^景景色
ハ随分好とありも亦此シケキニアと称せしむるは
地の渚ハ高嶺の麓に在り其地傾て其流疾く其地亦
と清潔なり渚の左濱に土人の住處ありて其構
築タヨホカ小^渚見^カも好と其上人も彼處よりハ
勝て見ゆ又之前にタロ根^カルベル^カ此固あり是ハ

此處に富戸と云ふ人又極多ありて其地
貴重なると云ふ人我等には一匹も賣らば其^谷谷の
はバウナタと名く衆人よりハ大に云く是れ^カ皆我
等より一服を賣與へし然も彼も其を財を手に種
事と云ふ彼好し我等と交易し財を却て終
小彼に利多しと云ふ又忽後悔して我より梅取
る品ハ如何も彼は好むと云ふ之を返して
彼を頼りて決断好し誠は我を困らすも我等

然彼と棄す必彼よりその贈物と與へしもの
度我等此より來りたるは彼方より一同は歡を
歐羅巴の此よりある我等を初とす 彼等我に對
て亦も不敬害心なく皆我等は無難を祝
たりバナミン及ブロードフリゴクテンを交易するに古き
鏡箱の打とを以てす此谷の婦人を夕ヨホア此
女と異なりして皆好き衣を各共衣は黄色此長き衣
よりして改る白き物より巻と此近隣の人と別とす

但椰子油を身塗る光澤あるを與とすと見
何者ハ我ホルトテニツアゴン此演じて見一其
そのとく油を塗てあはすと見一其後ニヤリ
ある時ハ彼等皆飾りたると見て是は光澤あり
見えりありも亦焼けるは各ヨホアの婦女
ハ一と見え彼等時は異邦の賓客を親近せん
と欲す。あるは害の槍子ハ此より減るあり
ハ皆上の住所より數百歩を離れ大なる平地の場

何れそそ前より長百尋^許洋の一尺洋の石を尋ぐる
臺ありを礎の細工の精工の歐羅巴の土人は船を
巧也ゆはとのほタヨホア^ノは見する品ありとロルツ
に聞^ル此の祭日大踊の時^ノ名物人の居場所ありと
晝後^ニ所^ニ我等船は返らん^トす^ル向風少^ク漸々^ニ
時^ノは返りぬドクトルナレシウスとランダスルヲロベルツ
と案内若^クして陸地を往^ルる^ルを^シ路^ノは^シ心^を
辛苦^シて之を越^ス陸地を往^ルて^ル立^止り^しる^ル船

お返り来る

十一^日は船は備^へ水薪^を全^く換^へ入^り十七^日曉^は
舟^中第一^の礎^を揚^げ八^時より九^時の礎^を揚^げむ此^の港
等^の山^の間^は在^りて不^断風^の吹^きお出^帆は^六
礎^揚の^場を^く暑^熱云^々其^の働^を難^し然^に
計^は時^は風^は續^て陸^の方^{より}吹^出既^に海^湾の^半に
至^るに^風又^替り^て船^の郷^向方^を変^へ旦^に海^湖少^く
次第^に西^の方^に船^を進^める^るを^止る^るを^止る^る

海灣の西側より百二十尋を離れて礎を下しぬき浪小
迫き亦も深二十尋あるに浪小迫きも船の危と
され然るに忽ち逆風吹き小礎より堪かすや二
此礎を下して海灣の中央小船をゆぬ子口船も風
の勢り吹くお悪くして辛苦し我船の湾を先とする
時小礎より遠離れしるを礎を入りかて盡四
時より我船再び湾の中央お出て風煩おなり直り
蒲帆を張て大洋お出んとするに風又多しと浪小再

ひ礎を下しお及ふに船時方船夫等絶す働き熱は
二十三度の浪おまは彼等の疲勞忘しは此より
在て休息すへいと云ふぬ夕八時より風おて終夜
吹りよりお氣何く風急活くお止てぬと信しぬ拂扇
系人ヨセスカハトは吹帆より我船お来り居るに
さきには我船の天幕おては來た速に陸地ををく
難んと欲し彼をも共小連まけおカハトは此小島

キリ

小吐白は

るよりハ其危見えて予彼我等と共ニ彼地を難
左の志願を知り只此は是れ計りしも
彼仇敵を奪取しむるを

予此次ハ我船の行前を記定き前ハ於ワシントン
諸島の方置及モ風土を記す是ハ多ニ方イワ島
に逗留す十日^詳しモ地方此説をモ知不在と云
歐羅巴人の助少ノ関集のた書多ハこれを記し載
亦モ其差とせされはれ也

奉使日本紀行

第八篇ワシントン諸島記

ワシントン諸島は西七百九十一年^{寛政三}年^{辛亥}五月

に甲比母グラム^北者ボストン^北比聖利加^北新諸島^北商船

ホ^南船にてタドサ^南諸島^南加^南島^南北^北聖^北利^北加^北の^北西

濱^北向^北の時^北お^北始^北く^北之^北を^北見^北か^北爾^北後^北教^北週^北を^北過^北き^北て^北拂^北

郎^北奈^北の^北シ^北ッ^北リ^北デ^北船^北甲^北比^北母^北カ^北ン^北ド^北も^北し^北小^北り^北き^北後^北ハ

レ^北ウ^北リ^北ー^北ウ^北以^北者^北之^北を^北獲^北き^北此^北カ^北ン^北ド^北は^北自^北分^北テ^北諸^北島^北の^北獲

兄の初より以内の一考に陸一マルカンド島と名付けしを拂
郎蔡國の亦屬と名する之其他バ小在る諸島を尋ね
皆丈に名をさう然とも其東なるヲホカ島をば尼がさ
す唯總て諸島とテランホリユナヨシ諸島と名く次年に
清厄利亞音子船のリイテナントルゲストなる者名を
きハニコウヘルの航海の助として運漕船五を
千七百九十二年寛政也 年壬子 三月此諸島を尼が一之を
審よりニウカイワ島の南側ホニツの湾港を尼が一小

私とて内の一考を送りて其島をホルトアンチリアと名つく
ハニコウヘル此諸島を總てヘルゲスト諸島と名く是はヘ
ルゲスト不幸に此旅中死す一考を為し記念としてかくる
注ヘルゲストはウヲホー島ふてサンドイク諸島の一人の爲
に殺されまると
ヘルゲストは後數月甲は丹ゴウシ 清厄利亞北高船テ
ホッテルウヲルトを以て此諸島を以て航一ヲホカ島の西濱
に居りしと然とも新ハ小島を以て最後の島哉

見都——はヨールポルツにて聖利加舶へルン此
甲は舟也此ルツバツワツに三月此間居住——
夫よりそ工人コアホガ人此を以て小送ると見ハ千七百九十二
年寛政五文二月形此ルツ實はワシントン諸島と
名けしもの始なりコアホ事、ロゲウカウルツ此聖利加紀
行にロルツガハを教えざる略記を載あるり如——
注ロゲウカウルツ此記ふ載る取此諸島の名ハ志精
記評なるはニアホガヤもランハツハとする如——

然ともインクラムケワシントン此名をニアホガヤコアホと
云 注此説はマサクユセフの傳の筆記にも有
此小史之をえはワシントン此名はルツを初とするなり
インクラム 城初とある、明ありしとす然ともは諸島此
教えハ聖利加人小傳——インクラムハワシントン此名を
そ一嘗に命するやもヤコアホルツハ此を諸島に命する
おもせよ此ハ名を用ふ以て証する也——又二の
教え者ハワシントンの名を用ふレホリユチヨシの名を命

たるとつゝも是ハ其南東ノ左ニルタイステメントサ 諸一ま
の内ノ之を合するハ地誌家ハ圖ニ示ル此少ク諸島
を一名ニ統るを以テ利とするハ控前ノといえども予謂ハ
別立スルハサワシトシテ 諸島此名を地誌より省くる事
也其甚敷見者ノ勤と名を世ニ傳へ以テ可成んや
又後世新ハ叢見キ一諸島を二百年以前より 忽ち
一諸島ハ合同して此を舊名の内ニ托し置テ可成ん
也予此云 地誌家ノ取捨ノ任すといへども今予ハ地誌

にはワシントン地誌を用て之を記する所也
此諸島ハメントサ諸島の内西に在テ次ハ峯ノ八島也
以テ一連とす南緯九度三十分より七度五分不測り
西經百三十九度五分三十分より百四十五度十分
不測り地誌表式ニテ諸島の本名を舉げ置る所此の
上ハ謂ハるの叢見者ノ名つぎ諸島を記す
其一ニユカイワ此島ハ此中ノ最上トシテ最長南東隅より
南西隅まで十七里あり其全周ハ岸ノ其地例を換ふる

と能くさるるを以て之を定む。と能くさるる方並に南東台
 南西の如くして東北東に西南西の向とす南例隅の如く
 向ひる後北東向とぬ南東例隅の向に令く北西向とす
 其南東隅をヘルケストハポイト正テンと名く我測從
 南緯八度五十七分西經百三十九度三十二分三十秒とす
 其南隅ハ緯八度五十八分四十秒經百三十九度四十四分
 三十秒とす北隅ハ緯八度五十三分三十秒經百三十
 九度四十九分也イングラハム此とヘテラルイスランドと

名くマルカンドはバセイイスレヘアウキスと名けヘルゲストはシ
 ルヘシリイマルチンスイスランドとヘルツハアグムスイストラトと名く

注市世古より還るすものよそ島の古名を知らんを要する
 此の如し程を要す此は僅かに理會光と力を以て
 其名謂の實よ合せんを欲す然るにウイリ
 の諸島のよ呼ひを此者何を見ず

其二 アホガ此島の諸島は最東に在其西隅ハ我測より
 緯八度半八分十五秒經百三十九度十二分とす二別

イワのホイシトマルチンより南東八十七度より十八里北距
とす其方郷向は東北東と西南西より長九里何れを西側
に一湾曲り此は我等に見る所とすマルカントは全く
此島を冠すイングラムは此をワシントンイスランドと名く
ヘルゲスト リヲウイスランドとくヘルツは此をマツサクセツイス
ランドと名く

其こユアボフ此島の諸島は最南に在る其北隅はホルトアチ
マリア北南小島にて二十四里の距とす我測は緯九度二十

一分秒経百三十九度三十九分とすワリテ北航士
此をイスレマルカントと名くイングラムは此をマタムスイストラ
ントとくヘルツハヘルツンイスランドとす此島と云く
其白砂糖塊の形は礁をも名くありマルカントは此
をレピタと名けイルワンは支より六年後はキルクと名く
ヘルゲストは此ユツテセン雪際風の構造なる寺阿と見え
らるを祀すマルカントは彼白礁を其形に依てマリスクと
名くイルソンスタクイスランドと名くと同くさるべきを認む

其四小島ありてユアポア島の南隅より南東一里半北距に
在小平島ありて周二里許マルカンドはイスレブラウラと
名けインクラムハリンコルンと名けイルソンバレーヘルと名け
只ルツハレホリユチランイスランドと名け予其系名を知ら
と探索せし知を能はずマルカンドの測り此島は南緯
九度二十九分三十分とすユアポア島と此小平島の間は
只ルツク嘗て通航せし所なり最難の所なりと
其五及六モウテユアイナイ此二島は小島ありて人居あり

島東西に對し其幅一里北海峡を隔つニユカイワの
南隅より北の方より南に二十里或隔は是等は其を隣
此島人漢の爲に此島ありとも彼等船の好むぬが
に海と危く其漁獲は獲物なく困るる時外に
此島列を以て此二島は我等は是と種マルカンド及ヘル
ケストの測量あり其西側も互に日一を以て緯度と
分れ是等あり我等ニユカイワ島の経度ヘルケスト北測と
比し且我月種の測と考合せし所なり此モウテユアイチ

イ此島敷を定むるに南緯八度五分五分西経
百四度五分 ときイシングラムは島敷フランキリ
ンと名けルルツは フラナイスランドと名く彼をよけ
島を御んそ一島と名く之と又ニユカイフは土人も
に唯一名をよけ

諸厄利亜人ルルツ敷をよけ請て云拂部家人ヨ
トセブカレトと此島も放流せんと欲す

其七及ハ「イアウ」ハツテユ一此二島も居人如き島にて

イアウ島は長八里幅二里何れ其南隅ハ「ルケスト」及
星字士ゴトク北側は南緯七度五分九分西経百四十一
度十三分とすコークハ其島より多し椰樹の多し生す
とんくう」とハツテユ一亦名ハハツテ「圓形」の島とて
其中央南緯七度五分五分西経百四十五度五分とすハ二
島はニユカイワ北西隅より十五度の間ありて六十里哉
隔をよけ隣島人此列て椰子を取るとイシングラ
ムハ此をコノキス島ハ「ロフ」島と名くハルケストは二島哉



昔はロルツイスラングと名く、ロルツは一戦フレーマントレ
ニとラント島と名く、と云

我等ニユイワ島まで此諸島の肥腴の地なるを
土人等もも同乳一々が高野の不足なる又某
と云す思ふは大洋に航する其法をインドサ
諸島哉ソレントン諸島に寄すとい好とも不
好とも決し能く是一始コーク此諸島あり船
中への入用の品を此と甚少く所し、又十七年

後マルカド此諸島に至りても亦此小説係する事
少くす此等諸島を多買事ハ出来能くはと
思へり是此物の此地は富きあるを以て租サド
イウ及ゲセルシカプ諸島北より多くは所は此と云も
お前中をなす一物とも其土人の風俗を先祖及傳
の系より脈肉を最一の供養と一外人は之を賣る事
と欲せざるなり我等シケキエアアして其谷中一
脈の多き所をなすれとも其一を買求る事も容易

ある所ありし如く又果実の類も食用も饒多し
予は是より椰子の我等日用に餘りといへとも其地
の産物もバナナ及びブロードフリクテンは此地には多し
其地はボルネオアンタマリア及ボルネオアンタマリアの地には多し
其地はボルネオアンタマリアの地には多し
此後伯西見地方より出て角岬を乗せ三月の
内ふるり船を長途よりして此諸島より船を以て休息
夾使すしてます 西墨利加又ハカマツカにゆく

ふべき所ありし且此諸島も食糧の不足多し故に
事も甚多し其地は南緯の地なりと云ふ島
人の助成ていふを以て小島なり是れ前云ふとく流し
浪ありて去人の其申を容易に往來する 歐羅
巴人は其地を能く居る土人と云ふ事あり其地を
取も又強しなり 且此土人の強し 易きに我等
見し所ありしなり 是れ角岬と云ふカマツカに見
とする所を伯西見より直にケセルカア諸島ボウルカイン

ヒレのイステスナヒカテウルス式フリントシカプス諸島より
列見し此等の如き所ありとも六也位ハ廻位の食糧を
備ふる事あり且此航路の順道より程未審の諸島
群は「ヘデュー」「ハコ」「ハコ」等の諸島を捜索せしむ
此使も阿る及其海中北新島を数見せる事あり
若又「西里利加」の北西濱式「コシヤク」は佳んとす。船ハ
止里南里利加の國名の海港の一あり。此如く新鮮の食糧
多く阿る時より「コシキク」に往者より便と。止里「コシ

ヤク」また「遠」と云々若サ「下」諸島の内は新島
好休息所と得。右幸なる處あり
是れ諸島より食糧を行く事ハ其利を祿するに
たふすことあり。程予委しく捜索せし。其のクヨハ
ホアー及「ユカイウ」南濱の記を執るも亦其用とせ
此濱の倉くもくして裂く。岩礁あり。濱より
傾きなり。其如く好澤布あり。其角より北南隔
にえり。澤布ハ最勝なり。此澤布ハ一の旗を下り

少くも二十人許ありてしらすとラングストルフ其流を
尋らにホルトナシテアコウに流むると其山ハ多の
禿山頗り連り此島の内部は入るとん有又南溪の北西
側ハ其溪低く平丈より漸く内部に向て土地高と
見えたりヘルゲスト北にハ其溪ハ全く礁を曲湾し何
ら其とも我等其内ハ湾曲も何と云へとも
詳しき事あり信尼利亜人ロルツは予話するに
其処に一谷ありて甚繁りて兵二十人を起

たふ是と此谷をホッテイシケウユと名くなん其
處ハ湾曲あり然も船を碇をきや不しを志
らすと東側の北隅をさまあり一湾あり
子ノ船の初にユカイワ人子由て知るあり
南溪ハ之港ありホーナバライをヘルゲスト北コムブ
トコワレル湾と名く及アナナマリア並ハホルトナシ
テツアゴア北也此路ハ二港の間に狭く入江
有と云とも碇均とするお冥かればホルトナシ

ツアゴフは予に予に能すコムプロッセル湾ハ我
之を乗過つれし毎く探りて予今ホ
ルトアテナリア湾を以て記すし

ニユカイワ島を以て東方より此に向へ先初にホ
イントマルチンと見えしはハ他の峯山歟とア
ん
たさなり 其處此地はコムプロッセル湾の東隅を
して遠く居る如く鉄石裂く礁並ひなり 其隅と
並に南澳に信尼利亞五里許を以て其の

深あり尋より三尋ありて底細砂なりし
一の思ふ礁ポイントマレナンより四百里一の距に在
て之を右の方に居る此よりコムプロッセル湾北より
南に同じ程其か——西に湾の如くを以てコムプロッセル
湾を全く見渡す——甲寅の向より庚申に於て延く
湾と其西に五里程乘入るるありマツタツと云
小島あり

此島をマツタツと名く土人は其魚取物なりと云

ニユカイワ 湾は釣竿城マツタウと云

港口の東陽より三十五尋許を離るる其西より
此島に向て百尋許有る百五十尋許北距まで之を系
廻す時はボルトアシナハマリア港より其北の西側より又
一小島出マツタウの大の如き所此二島の間に三十五尋許の
峽を隔て唯小舟を通すべし此小島を土人モツトヌウと
モツトヌウとは大島北或は島の小舟を繋ぐ名くと
此島より十五尋有る十五尋許を離て一礁有りて著しす

マツタウとモツトヌウとを以てボルトアシナマリア湾の口を
此港口と出入有る其西側の島を多く寄居へかゝる
風の弱きも強も甚危しと云湾内は風有りては西側を
離るる五十五尋有る東側より依るやうにして是の時
危殆を極く其風弱吹風の替り易き時は此島
より一かゝる此湾の言ふやうに圍はるる常は風の替り
多く其風息らるる西或は北逆風とあり或は令
く止むとありて是危き所なり諸島は陸より見るに

甚容易なるに北流より四百里より此湾の東西
向に廣く其東流より四百里許の処を碇場と
置しとす此より北十五里北東に向に位處へ
北流に小門ありて水と海をへし流より半里許
あり東側を西側より置とす此の天氣亦尚ほ少
く我船は十日の間此碇場をへし碇場と置し
然とも子午船は西側を碇しと目こ碇場を直しとす也
ワシントン諸島の氣候をけしとすサトサ諸島の氣

候と異なり候とすカント北紀行に五月ポルトマドレナ
ス^レトキ^リより^テルモノ^リテルニ^七夜^ニと我等^ハポルトアン
ナマリア子^在時^はテルモノ^リテル^船より^ニ十五^夜を^極り
孝^子は^ニ十二^夜交^へ彼^島より^ハ此^島より^ハ二^夜を^一め^此
大^熱心^なれ^とも^氣候^ハ人^の為^ニ中^和なり^と其^地は^僅む
歐^羅巴^人等^我等^の話^をに^氣候^を知^るに^ハ此^島は^規
土^人の^顔色^の爽^快なり^と其^地は^一と^{あり}總^て規^矩
の^間の^地方^に是^時を^雨の^時と^す然^とも^ハ此^地方^に是^時に^稀に

十月廿日一滴の毎形き阿り此時の大飢饉より土人
夥數死す事なりと

此諸島にも東南のハツサード風多し然とも又南西風の吹
續くも阿り此時土人甚南東隣の諸島へ渡ると阿り
ホルトアンナマリアの晝夜一陸と海の風吹替り然
とも大抵其風弱く又時の山谷より暴風起り阿り此島
より測量船を地方へ送り此島をめぐりしホル子ル
船の此島を総て一日測量して時計の行なせり

又五月十八日三八號時計がレーンワイク北中教時計より
遅る七時五十分二十秒其毎北遅二秒三の如と
其一八五六の時計遅ると十時十五分八秒其毎
の速二十秒五十分減とす

ヘンニグト北の時計は換りしと申は舟りレヤン
人を以て之を修繕し又五月十八日ケニーニク北中教
時計一時四十分九秒の遅りと十六秒四十分減とす
ホルトアンナマリア港日マタラとモットスウ北の南緯八度

五十四分三十六秒又ホルトアンナマリア北経夜ハ予及ホル
子ルと第四月二十九日より第五月四日と四十三回の月雜
此測と第五月三日より七日迄の午西の測並に一三八
時時斗北校正教子從て西徑百三十九度三十九分
早五秒と云

此測ハ一分を加へルケスト及コーク北測亦同一マルカ
ンド北測よりハ弦と半反亦なりと云

アルノルツ時斗三八時より後ハレントカタリナ北行の二百四
十夜四十分三十九秒又アルノルツ時斗一八五六時より後ハ
亦レントカタリナ北行より二秒多ク百四十五度二十九分三
十秒と云 羅盤星ハ五月七日及十八日の中教子從て
百四十五分三十九秒北東星と云

潮の干満ハ溪の忽浪高しと云 潮の漲るを能く見ても
大抵程能く時毎にお代ると云 由満を東より東より朝
汐の五時の高と云 潮よりして三尺水過ると云

奉使日本紀行

青地 盈譯
高橋景保校

第九篇 ニュカイワ土人記

予此大洋の諸島中にて唯サトイクとワレングトン諸島の土人を凡そ此の如きともおもふ。ワレングトン土人の形體美完好。他諸島中に最勝ありと思ふ。コークは大洋地方に諸島記を以て考や。コークはワレングトン人の如き者。他諸島に比例する如きはコーク及ホルステル乃とドサ諸島記にて記す。——造物主獨ワレングトン人にして其美を予へ

給へる是より他諸島といへる平等なる天の恵を受
へる程に亦ニカイワ土人も徳為人と同し 憧れを君
臣上下の程を明しせし小非す然在。ニカイワ此首首成
者僅ふに属す然れども能く君より威望を保て此
等此尊ぶは均す亦此に是を主とする者此僅ふも徳
阿ふに因て然るとせん是を第一地方に自是此勢あり所
以ありあり

ニカイワ人の形骸の丈さくは助強く既也 容貌恰好周

旋便捷なり然も此美修を専らし俗習小纏をれそ
ぬ交を清くしし唯魯鈍野鄙に足りしを支體不敷文
しそ之を塗漆して其色を黒然も服文ぬき小兒婦人故
之とは元其色は自分白くして 歐羅巴人の如く俱か
其色を帯る而已又ニカイワ人の他諸島人と異とするは
其體中小瘡痕疹斑ありし身體の清潔なるを以て土人
の常す蓋も他諸島の人ハカハ下條子下條子を飲る事あり
故も其身を痛む御るにニカイワ人の甚之を憐し居

にしるを以て其毒ありとも又其土人の毒に微毒を患る
 事あり其土人ニカイワ人の強健に病む人の三^傷次むへし
 西之見あり土人病苦を志す又葉刺りある事あり
 唯彼らもハカハマとして此は病を致さるの事として
 是は皮膚首に良術を治するとするといふことあり

①予ハニカイワ島より北に上陸キテ其島あり其
 紀元然ともニカイワとワニグトシ諸島の一事あり

ありニトサ諸島も亦あり其土人の風俗
 皆似るものとすなり

ニカイワ土人の皆其此體先好む月も二人の最勝と
 其土人の其ハタコホア子居る其土人は
 て此を詳しとは國を北司^{ヒコルアニアケル}焼とす其土人は
 コウハウと云其丈夫二人守りて強壯の男とす其二人は
 ニチキユア谷の首首としてハウテングと名く其已お五十
 には一と云も完好強壯の男なり

婦人、密髭列、著、ま、あ、り、は、り、も、^紅總て他島、
ハ、胸、う、て、羨、好、う、一、頭、中、字、の、大、サ、新、酒、ハ、長、さ、ま、う、ハ、圓、
ま、か、り、あ、り、眼、中、夾、法、顔、色、淡、紅、皓、齒、整、列、髮、友、ハ、卷、
縮、し、白、き、糸、ま、り、狭、い、肢、體、白、色、う、て、總、て、サ、ド、イ、ク、
フ、シ、イ、テ、イ、フ、又、フ、リ、ー、ト、シ、カ、フ、諸、島、の、女、より、羨、好、り、と、す、
① シ、ケ、キ、ユ、ア、の、婦、女、ハ、タ、ヨ、ホ、ア、
此、女、より、も、羨、好、ま、し、え、ん、う、り 概、し、て、之、と、これ、を、
固、より、偏、地、の、風、俗、を、し、取、り、ま、者、如、き、シ、ン、ダ、ナ、及、マ、ル、
カ、ノ、下、の、旅、伴、を、し、し、も、目、は、あ、る、む、し、い、あ、る、さ、る、之、其、態、

先、醜、ま、あ、り、以、體、ハ、多、く、ハ、小、形、か、り、あ、り、少、く、梳、飾、を、後、け、
去、十、八、年、の、娘、を、し、し、小、聊、も、梳、飾、を、し、あ、り、志、望、ぬ、あ、ら、し、あ、り、
必、足、を、そ、ゆ、を、ま、ゆ、く、之、女、ハ、何、れ、も、腰、非、常、に、肥、大、なり、
彼、俗、ハ、之、故、好、と、せ、り、と、名、為、妙、何、と、あ、れ、は、彼、是、の、意、張、
醜、と、お、も、事、ハ、彼、等、も、梳、飾、を、用、て、人、の、陰、を、如、し、
是、ハ、彼、の、意、ハ、醜、と、せ、さ、る、と、え、ん、う、り、ト、ム、ン、セ、ら、し、
彼、の、梳、飾、を、時、を、即、多、く、梳、へ、ら、し、
と、云、ハ、ニ、ユ、カ、イ、ワ、此、婦、人、を、い、ふ、高、く、と、す、は、地、の、女、故、

良善なり」と云ハ
テタヘイテ此土人及ワイニイ下ナ事
飾り云々ありて其總て行我軍カと名有彼城
田舎風と云ハ其形我何キ其形體の姿も先子
を謂ふなり也

①注 ワイニイハ「サントイク此小女の名もて此者ハ甲比丹ノ
ニスの姉ベルクイ甲比丹と共に西村加の北西溪
に住一時的女也ヲワイイより百連て歐邏巴西
らんとて支那小島り一々よりメアニス又彼城

其本土小送り返りぬる其途ありて女死すと云
メアニス此紀行より也

ニエカイウ此男子ハ其成人の比小あり即全體を彫録して
紋をありて其工を云々ハ此島の工巧ハ彫紋等外小
比彫禱ありて其皮小血の切り程あり小き社を作
諸種図畫畫き人を思の色小漆込大極小青
何の色ありて高直及高直の又ハ全體を彫録紋思
彫紋彫り肌膚ハ元えぬやうせり其腕及頭の彫紋を

刺さるるも皆彫紋せりゲセルシカプ及フリーントシカプ諸
島は其體彫紋せり但フリントシカプとハ其島を
の文身をなすニエーランド及サトイク島の其西
彫紋と甲比丹キングゲ祀る如くニエーランドと
ニカイロ人の彫紋の法を相傳へ但ニカイロ人の諸島の
像を彫て全身に環の如く相集りて巧く画くを飾とす
婦人の唯平腕耳の彫紋彫り彫紋其角も早性の
者の彫紋せりも何れ此より由りて彫紋あるその

貴む彫紋を知へ其主人の内は彫紋ある術とある者
何れ其術者の一人彫紋を拓て或船支の彫紋せり或
見しと也

男子皆彫紋を裁る然も稀は其皮を彫り
彫るも又サクリステナの島の土人のとく彫と
以て彫頭皮を彫り彫るを避るるも云或は彫紋
の彫れありと云然も是其実とあるはと名をばる
を安んずる小陰を以て然り掩ひある彫りて之を掩

を隠す法とす ニカイワ人の意ハ唯之を隠すを情と
し然るに大なる恥とするを以て我船の周
圍に島の女子とも多く戯遊ひありし時船丈の一人偶
其法を現ししは彼女是恥ふては船丈と嫌ふ
也只此のニカイワの婦人の陰を掩ふの情なき
男を付甚嫌むるを以て信習と爲す

男子ハ亦小褌を以て島主とては然る唯腰の團子
袴き布を纏ふもあり此等フリフリカア島人の口

と名くニカイワ人の其密なるをテシアボと名け其麻の多を
エアチエと名く然とも此ともニカイワ人なく之を茅の
非す彼マウハリーに貴族を遣とも之を帯以て彼不
あなまを之と云ふは其後船が来る時を以て其之を
茅を以てマツテン其席を用ふ島の人の義子もマツテン
肩て船が来るを以て其甚く麻を以て之を肩懸て腰
乃下を以て其脊を掩ふの也其他衣服は其
と野島主も有るなり是其土俗を由て然るのなり

此ハ其物ノ之一キカカハキリステナ島トシ
其島主ノ美被を着セラセニ一トナリ

ニカイノ人も飾トスル物アリ不阿ラハ然トモ世を爵位
ノ表トスル非スル島主も其親族も飾を用スル
を見ハ唯島主ノ義子ト取齒を飾ト用スル
是ハホルステル欲メントサノ土人ヨリ一ト見
取ノ齒ト赤色ノ髪を其取ノ最好ノ飾トスホルステ
ル妻一キ記ナリ此ノ之を墨記トシ頭飾ハ飾ヲノ

黒キ羽或ハ柳樹ノ絲ハ真珠を飾或ハ白木ノ飾ヲを絲
或並ニ編テ垂ル物一或ハ大ナル葉を頭髪ノ結ニ
挿シテ飾トス耳飾ハ白キ円ニ甲貝ノ堅クテ砂質
を濡シル物一孔を穿テ取齒を挿シテ或耳ニホシ母ノ
アリ頭飾ハ最モ寸其形リニカラクク其掛ル如ク半
月形トシテ白木ヲ以テ造リ赤キ髪ト敷ル是ハ僧徒
ノ用スル等庸人其取飾令ク取齒ヲ以テ柳樹ノ
糸ヲ編シナリ或ハ唯取齒ヲ頭ノ圍ニ若ハ髪ノ邊ニ掛

る有り又ハ林檎の太き如き囊を造りて之は赤き是れ
充て之を掛るも有頭ハ兩側ハ髪を少く遺して其髪を
剃き其遺ハ髪ハ螺の如く小巻く有り多ハ髪を全く
剃去す短く毛の如く一重之髪も垂弗利加人ハ如く
解す

婦世の衣ハ全く帯の如くして男の如く膝間より貫き
纏ふハ眺の遠まき及み然も彼等船を遊き去り
時ハ彼帯此如きものもナシアホまでも脱棄して遊ぐ之

身體を白日に椰子油を塗て光澤を眩とも其何し
息有り是太陽の輝を防ぐ為、或虫を通る為、予
は於て解らる事ぬ——男子の服紋——黄危小
准りも亦何の爲といふを明しせらる之地ハ女ハ既
飾を用る者といふ而して彼者扇と持し其扇ハ平
親の形なりて草を以て巧小編方物之或ハ蠟殼灰
にて塗白く其婦女の髪ハ皆悉く多く油を塗頭上ハ
束福で一絛となす如女子

ニカイワ人の家室ハ狭き構にて葦比敷にて樹枝を以て造る其樹を土人ハアウと名く此を椰葉とステーレン
ユロイト 其し後ハ其家後ハ高き前ハ低くブロード
ユ樹の乾葉を以て蓋ひて居り厚み寸許あり
一例ハ向て降る室内ハ縦ハ杖を以て隔る二区
コ分ち前ハ石を敷て後ハは薦を敷き何れ
後あり方ハは家族及家具を置たり又列り小
區より團こむらなるあり其ハ其室とする物を造る

あり庭ハ此壁ハは欽瓢太鼓弓矢等を懸く門戸
ハ家の中ハ此如き三人許あり家族中一も
此ハ集る其位するあり二十寸式二十五寸を隔
る又一室の家あり其構造ハ前のもく唯其家
ハ地基一尺半ハ二尺許ある地異と云は家の前
に平なり高き地面ありて家の長と幅と
十尺或ハ十二尺何れ此家ハ饗宴の処と云は
と其足及僧官と一の兵將のこ此ハ入り代

許すなり 此客室ある者ハ甚貴族にして常ニ衆
客ニ食儀ヲ伴ハルニ是ハ之ニ伴伴に入りたるもの
ハ如何ニ成飢饉ニても其小此ハ食を事と爲す
法トす此伴ヲ入る者ハ各其體ヲ操テ各脈文何
碎云ハ島主の伴ハ惣テ二十六人トシ各胸ニ方形
長六寸幅四寸なる角形を彫シ彼僭厄利亞人
ロルツも其伴ヲ入る者ト掃部寮人ヨルセブ
テカブリト此脈文ハ眼の標トシ彼伴ハロルツ云

彼も飢饉ニ苦ムト云ふ事ハ其伴ヲ入る者ト
と相りトハ其伴を結ぶの理ヲ於テ不審ナル事
何リ夫世伴を結ぶ者ハ其の生産を保つるの事
ロルツの系從ハ狂大なる貴ニト云ふ所ハ人伴法
結ぶを勵むと云ハ思ハルハ其伴を結ぶも自然の勢ハ
蓋ありと云フ何者其人ト徳ありて其伴を惠ム
只トされたり島主の如クハ彼 中ノ事ト云フ
其各番なる所ト云フ且其ノも今恩を謝する心を

よそ 知通し

①注 名也 我船を訪ふ毎ふ彼不答あるす其品も元
より僅なる物あれどもニエカイワ人 妙は重寶とする
物之然とも彼より一物をも我に贈るを好く椰子をも
返礼として送るは第七篇に記する如く彼保く驛
動せし後復我船に來り和語の事として一書
此胡椒樹を送るは夫をも又後悔を起して
平時許過て彼よりいふ其品用ふ尚多しと云

明は己と云ふんと請ひたりなり

如は人として尙小泉人を其值の養少事ハ云々
くは為一坊へきり遊守其其値と云ふは伴を以
之を其伴に強ふとを拒む所なる事ありと云々
執力ありと云ふん是は土の風ありと云々ニエカイワの由を
色今より数年切経を令く威執力を失ひ其伴と
出る者の外ハ石申此綫氏より今を施すの能を以
表す所之也 諸婦女ハ此伴小閑なる所を以

といふも伴食^{まじり}は伴食^{まじり}は又豚肉を食すも
大抵の婦人は禁んで居すミルクを平ら告て云
豚肉羨ありといふも是は我婦子分を能く云

①此地方に諸島人皆婦人の豚肉を食ふと云

林山と云

其位より十歩或ハ十五歩を去り地より許多此
洞を穿て食料を行ふ處とす其洞穴ハ石瓦ハ
木瓦と云く掩とす其食料ハ炙りたる魚及シユール

ポツジン我最多し一寺世シユールポツドは夕口根とフロ
ードフリウクトを以て泥と云く物之は等の不城多
終(数月の食料)は此地洞中より長く露敗等
と有り食を製する最簡易此法をしてツタヘイト人の法
此如し彼人食料の首とすはシユールポツンとしてを味
^{林橋よめて}製する菓餅の如し其他はヤー山
^{外トロハ子シ}及甘蔗等(食料)を炙りたる子シ葉
のより置て之を焼と砕を用る如し魚ハ大抵生にて

食一不^レ_レ汁^レ漬し用也食者状其^レ穢く唯指
とニールポワシ^レ泥中^レ挿て^レ搥み喰ふ^レ爲此食者
哉^レ小然り^レと^レ其餘^レ推^レて^レ起^レし^レ食^レ終^レ是^レ局
手を洗ふ也

器械最少^レ銳^死尖^死石^死伐^死鑽^死歐羅巴^死乃^死斧
の代^死は^死ま^死く^死扁^死形^死石^死と^死て^死之^死小^死齒^死以^死彼^死我^死等^死り^死
鉄の小片^死を^死た^死い^死直^死し^死此^死と^死木^死小^死植^死て^死其^死鉄^死の一^死側^死を^死
石^死小^死礪^死て^死又^死り^死用^死也^死石^死彼^死石^死脊^死を^死用^死て^死漁^死船^死を^死造

居^死る^死哉^死る^死泉^死の^死用具^死椰子^死殼^死殼^死樹^死皮^死杯^死釣^死竿
釣^死糸^死及^死簞^死齒^死是^死刺^死刀^死代^死用^死の^死カラ^死バ^死セ^死ン^死及^死椰子^死搥
ハ^死索^死一^死は^死簞^死の^死齒^死め^死て^死飾^死を^死好^死す
武器^死の^死棒^死木^死牙^死抛^死石^死あり^死棒^死は^死カ^死リ^死子^死木^死め^死て
造^死る^死此^死木^死ハ^死甚^死堅^死重^死光^死澤^死あり^死長^死五^死尺^死許^死あり^死て^死重^死ミ^死メ
より^死少^死か^死ら^死は^死其^死一^死端^死ハ^死人^死頭^死の^死状^死を^死像^死也^死牙^死ハ^死同^死木^死より^死長
十^死尺^死或^死十二^死尺^死其^死中^死ハ^死二^死寸^死許^死の^死太^死し^死て^死両^死端^死ハ^死小^死大
銳^死り^死抛^死石^死具^死ハ^死細^死子^死列^死衣^死る^死索^死より^死綯^死る^死光^死ニ^死中

を幅広くして此は石を挿む也

ニユカイワ人の魚捕法ハ礁石の生る草其根を取
て之を石を以て碎き廻して漁者ハ石を取て自ら水
中に潜て之を海底に散布す如きは是は整へて魚
盡く酔らぬ半死の向て水面に浮む時之を捕らぬ
ニハ徳を以て捕らぬと云ふ世法ハ古切とす外則ヨ
唯漁船ハ艘行而已之ハ釣竿を以て是釣糸なり
はハウ樹皮の索を以てす此索ハ船を繋ぎて之を向

らるあり或ハ椰子の糸を以て製成するも阿ノ是ハ最
佳織之なり但魚を捕らぬ島中の漁人ハ業として
生産を為者として我船より魚を善價を以て之を
買つて大味あるボテン魚の七八口を送り来るの事
其漁を業とする者の少き故知るべし

注 ニユリナメンに於て漁者の魚を毒 取らぬ法

と目一き知るべし

ニユカイワ人の船ハ所用ハ材不申て之品有りボードフ

ニエラ樹とマヨヨ樹とを造るハタマナ樹とを造るハ
賤と云々タマナ樹とを造るは其用を為事久しく
且舟の走事速なる故貴と云其下口心と云ハ椰樹
の索を以て船木を編む物也此諸舟の中にて最大と
なるハ長三十三尺幅三尺半深二尺半ありと云

①注 ニエカイワ此葉船と云 海よはゆすハ其形子積ふ大枚
を結付て其顛を覆と防げやと

ニエカイワ人ハ事懶と云ハ耕墾を勤力ハ此業のまこと

此洋中の他高きものもよく此を切すは「ヒールケルベイ」
コロラルレル「ハーベル」園止此園ありといふも此を培養乃
業也 是れ子コロラルレルの産物也之れは且土人男女の
衣服の屨名ありと云知るハ「ゴロドボム」園「バナ」園椰樹の
類も之を養滋する術を好む之を植る小島土人宛を
穿てて樹の截枝を以て挿置一月許を経て樹の自
ら生植するに任すのこ別子培ふとも好し如是れ男子
ハ耕墾の事もれく漁を好みて之を為し其家完及

器械等の制作業とするもの多し然るに是れは
男子常に閑暇して終日宅に居て其婦妻と戯遊す
る節あり婦女子に比しては事業多く繩索糸
紐と製衣——扇を造り又其丈夫及びの飾とするもの
作り最女の業と云ふ其衣履と云ふ織物を作る其糸
細三種あり其糸色灰色あり布より樹の皮を織り
て帯ナシヤボスに用ひ貧婦ハ之を衣とする其細糸ハ
ルルルベシト云く製す其色白く光澤あり貴婦の衣

及頭飾と——用ひ細糸とす其糸糸細糸ハ
細布とす然るも緻密なり非ず其糸と云ふ
亦疏布より密なりものあり
其此糸より製成す其先其衣飾に於てハ少く土人
と別れ又土人を使令する威勢も似く彼人をお時
又人より其種を教へて裁つ時ハ彼より教へ成と
関し其時の威勢もかの如し密なるに其糸
者ハ其強健ありて勇あるを以て衆人ヲ推し貴

らうと見ゆとは予考すは 島はマロハ
ウ無名の威勢は居る屋敷にと思はるは島主の土人
降れ主とするは唯彼大富より他人より春族多く
保てるのこよあり也

島主の権威も亦此子少しは國政とある事有盗
罪とせしものあり程よりよすとい之を功とて好意を
唯島主の春族より殺す人を殺すもの
罪とせしものあり保より之を罪とす一其殺す

是と者親族より他を殺て之を殺す

①注 我船のせり這ある中盗の思ありしは船主
に常に書合の書器と具してありあるがし彼等も盗を
為すの同然故と見ゆ

ニカイワ人の家事ハ予見聞ある外は從ハ善也
先夫妻此結を解して放淫を禁めんとすも夫婦の會
何の礼式もなく唯互小愛し親むる外は我部は洋中諸
島の中は男女の別は着して法ありとゆふもニカイワ

人はは絶て其儀矣と云ふ其淫を罪とはせられとも
之を犯すも互にお互^刃ふと其俗とすると兄元と云ふ

①注 拂廊^{ハシ}の人の既^{ハシ}此^{ハシ}十年住居して全くは島人成
しる者云世島人の其妹と淫するあり是世島人の性とい
しき説ありと

飢饉の時よ夫其妻を殺して其肉を食し又其殺て
之を食して其味^{ハシ}賞すと云殘虐の事もエカイワ人亦
有なりと云く、但只ルツハ島人の姻属と云くは島人の

堂^{ハシ}明^{ハシ}きは^{ハシ}移^{ハシ}て島主の事ハ善^{ハシ}不^{ハシ}とも彼^{ハシ}は島主及島
主^{ハシ}属^{ハシ}とも者ハ其妻他人^{ハシ}従^{ハシ}ふ事^{ハシ}つと見^{ハシ}れ自分^{ハシ}之^{ハシ}殺
の權を許さると此^{ハシ}よ由て之^{ハシ}を兄^{ハシ}は其殘^{ハシ}惡^{ハシ}なる事^{ハシ}何^{ハシ}を
爲^{ハシ}す屬^{ハシ}一^{ハシ}彼^{ハシ}志^{ハシ}云^{ハシ}島主の属の女子たりとも^{ハシ}婚^{ハシ}嫁^{ハシ}も^{ハシ}於^{ハシ}てハ
列^{ハシ}に^{ハシ}家人^{ハシ}小^{ハシ}異^{ハシ}なる^{ハシ}夫^{ハシ}ハ^{ハシ}あ^{ハシ}ら^{ハシ}ぬ^{ハシ}と^{ハシ}云^{ハシ}也

島主^{ハシ}此^{ハシ}世^{ハシ}と^{ハシ}云^{ハシ}者^{ハシ}ハ^{ハシ}ヒ^{ハシ}ナ^{ハシ}ア^{ハシ}ン^{ハシ}ニ^{ハシ}ケ^{ハシ}ル^{ハシ}之^{ハシ}ハ^{ハシ}勅^{ハシ}ハ^{ハシ}島主
家族の側^{ハシ}不^{ハシ}居^{ハシ}て其命令^{ハシ}を^{ハシ}傳^{ハシ}ふ^{ハシ}之^{ハシ}ハ^{ハシ}不^{ハシ}由^{ハシ}て島主^{ハシ}ハ^{ハシ}此^{ハシ}地^{ハシ}の
主^{ハシ}成^{ハシ}ら^{ハシ}る^{ハシ}を^{ハシ}頭^{ハシ}と^{ハシ}云^{ハシ}る^{ハシ}島主の婦人を守護し^{ハシ}て^{ハシ}身^{ハシ}一

婦人の阿のぬ時ハ身二の婦人をも獲^獲を畢竟ヒニルア
ニマケルを島主の警固として而して其婦の守獲^獲之
ニユカイワ人の人肉を食ふといふの虚を以て之を盾に彼
を隣の人と殺す人肉を喰ふ之と或云ニユカイワ人の
性ハ序狼に似たり其殺をあるハ大敵と大戦をふる非ず
唯常に敵とおんひ令て之を殺すハ在其國の術と
あるハ久しく依れども勤ず氣息を静す疾く走り
鷹より進み能き越^越を答とん土人の内にはマウウと

最勝の海勇と寸拂部多ハ能世諸術ハ巧人と彼
教^教て中ハ詰る其國ハ勝^勝と事とつハ只ルツも^{拂部}
刺^刺ハ刺勝て其敵の肉を食せ之を皮肉^{皮肉}と
此等の諸谷ホレメシケキユア^{ホッテイシケウア}はタヨホア
川と名に關成をす者之又ハ地ハ在る一國も同じく敵と
をホレ^{ホレ}七兵^{七兵}と名^名タアイヒスと名^名大海の軍と云
成^成ありと塔^塔タイヒスとタアヨホア^山と名^名海上の國ハ
好く隆陸地と於て關^關ハ其の多く諸谷に群を結

久々其商主のて之を責て國王と之不属する
に其商主も格別なる勢あるも何れも其主家
を責む事何のあそと云と云ふは是昔より意味して
かく吾等も不固もの如んケットロイウエー
の子嘗てタイヒスの女と婚を結ひ其國を引つ
和陸を是海はターボと一清浄を血を播せる等
而ともれは後不世子其妃と種別一妃其親家
に歸りる不又二國互不戦を起し終不陸の如
くは海の上

に及ぬ然る彼妃其谷少て死し其靈神と
なりて其に
彼者も遊りて不由て其神を
の海戦を止め終る永くお和陸
地の一角にウダイと名く兵
今ケットロイウエーの女と婚
し相和陸して戦を止め
ウダイは常にカヨホアに
及らウナングに於て
我船不來りる不我
等皆之を見し

タアラホア人とタイヒス人の陸地の戦は互に休息の時あり
其休息の時躍りあつて神祭をなすあり此時は故も其方
を定めしめて戦を休め其祭を修し其時亦人ごはる
の用意支度を調ふことあり是かゝるときに闘を好む人なれども
時に休むその用意を調ふに今、既戦を休てより六月迄
降りし船は後八箇月を降て其祭の時と爲るこも祭の
終て後人ごの祭の神より後戦を修む凡此戦の
休を双方に志すも亦いふ山頂椰樹の枝を建るを以て

各戦を休むを其控すかく戦を休む神の命も後戦の
根元を除くと能くは是と云ふこと又此國でも其邊の國
も亦其貴きもの僧の死する時、必人三人を執り供を
考とす其執り成者、各國中の人を以て其必を隣
國人を執り來て之を好む亦其の執を求む時、亦不
船を舩りて此方の弱き船を奪て其人を用ふは時
には海より其戦を修むも然れども其の戦と云ふは戦
は其海又其前のとく清浄の如と云ふこと或は海上で執

を清き時ハ降して礁の間より島人の船より来りて之を
執ふ之を供ふ不直し切殺せしに似る此を樹に執りて懸て
其肉の骨より種を返突さしむ之は贖初日小舟に
入らざる時即個人小船で我を起す之然とも我を執り
の救僅れは久しかりて其事之と我等々返るの時
に別割ア皆傷大痛も快復復はと来りしと人の云な
れは其贖の我に起るんとする時其れりき此に傷何
も其いふ傷の教法もあえしニユカイワ人の教法い何と云

其土俗を以て容易に承せしはへし其教と云ふは由
て此我修め心を安んじ此理なく唯現在の安んを以て
為し修むる事と見ゆ是傷をターボとす此之の形を
か此傷と云人の貴い此法亦要する事ゆえに其
傷法は理好き果怪の事と云彼云テア非靈と名くも
しは種より即傷及島に此属の靈を崇めて正テア
とい又彼等歐羅巴人とも云テアと思へり何者彼
等、視る不唯地平上の其門小舟の外を志し

故小歐羅巴の船ハ海中より降り来ると云ひて是をエテユ
アの取為と云ふ是且又雷ハ歐羅巴船の海中に浮て大
砲を放つ事と云ひ大砲を云へば志忠怖をぬき

崇世島主の弟我船より時船中より砲を放
し小主人志忠怖しそルツに云みつき死者、とき
彩色とある声をおりマッテマッテと云ふ唱居りし之
彼らチボと名く事ハ其僧法の根柢断りて少ハ命益
何とも云ひ者チボと云ふ小島主と云ふ之は地紀

と能き何の理あり云之を云ふむ著くも之チボを建つハ
傍の舟をくき知とすきとも平人も之を建つ事をたし
能く人ありてフロートフリユク樹或椰或其園圃は盗あり
之は損一害する者何をばくすはそ又或島を或は地の
人の霊の名を以て其樹着^若に在と云ふと人^にに著る時
人^に教て之を侵すと云ふ之を人^に之を侵^侵ターボを傷
く時此者をギノキノイヌと名け此者ハかめら
故小殺され又必き傍より其意を報^信ふありとい

厄利 五人只ルツ毎夜歌通巴人の彼、不謂夕一ボ
りと云然とも彼も既七年未此地に居て此土人
交り好きは姑のそく我をエテアとせし其威光を
消し七世以後の戦も執れと明ら、故の乃小肉を
喰れんや吾も心も不好りと

只ルツも此地の法教の事一き事ハ志らんと云然其
大略を語り一ハ先其死一若此葬式、其屍を洗
ちて新しき衣を被せ一十年ある降起き地も裁

て又之を瘞ふ一形一き衣被を以て一其聖日死者の
親屬集りて死を明す一此ハ其志也其者加て其
糸を明すを信者ハ此ハ在て云一但婦女ハ糸に
結ぶ一物其糸は富者ハ糸を以て其是取ハ
の大事ハ非也一人の食と信事、稀なるものと其糸ハ
タロウナルレルフロートクユクを信一其宿客相集る時
糸の頭を切取て明す死者の下男ハ降りて往生
は多事と祝する一其肉ハ信の私に用るもの一唯

僅なり肉と一ヶ石の下に納へ置かしく其親屬
友人数月の間此屍を守り不火柳油を以て屍を塗り
その腐壞を防ぎ屍既ニ乾固して石の下に成初なり
十二月越えて又此屍を納す之に祭死志此既障の代界
に往き願きたる故謝する為ふす取すて葬れ或は
是より終り是より捨て其屍を碎き其骨を捨る事
フロートブリヲ木舟で送る物を入れて墓所謂モライに送り
ざる所此墓前より婦女を殺せし罪を乞ふ事一或

棟瓦と船

此島の諸島に於て魔術師は是も其信教と相與る
事と思ふ何者其信のい此魔術を行はし由て
土人を恐れしめ其布施物を貪りたる好し其術を
カハと名くはし其人を呪咀して漸く其人を衰め
る二十日中して死せしむ其術を行ふ先其人の唾液
大巾便を求め取て此より一種の粉を文へ之を異候子
組に效布るとき物を入れて之を土に埋し置あり其

秘とする事ハ紋布の組りと其粉の製法なりとかく
其敗布を埋むと其術此方より呪を多く人病つきて目も
増し衰弱し終り二十日ありて死する之物なりとかく呪を
者も終十九日より前あるは此より取捨其重寶と
其物を出して其命を助かん事此術より請ふ時ハ
則甚難しと云物成場をせば其病漸くと快くぬて斬
の月まで平復すと「ロベル」は他事に智ある男なり
ともは魔術をも信すと云此より同く拂郎人人も

之を信して此術を知んと辛苦せしなり是彼の敵と
は「ロベル」を以て術を除去んと欲してなりしと然と
「ロベル」は魔を防ぎて法を所持せしなり魔術より呪
咀を多しとハ能く其術を破りて其防ぎと云ふハ何ぞと云は
一個の武器を所持せしとはなりしと「ロベル」は其敵を
んぬる事と申は丹リヤンスユイと云ふ所の金と云
● 一対のヒストルの銃 蓋は一挺の銃彈丸大サ榮と其
一と求めし我等「ロベル」は此地より多くの事なり

達——是れは我理も何とは此果亦ハ悪直き事をね
然とも悪考して彼が為ニ益とぬるまき程何れ
はそなた位に何者は比し蹴起うたん存口ルツ
必其我等、贈る前の天業を以て之を射るに阿るべ
然る時ハ彼が玉業を隠し行へうとふ事ハ高山中此
人皆あつてはし事蹴起——彼が寶を奪はんといふ
者阿る程——然るとまハ口ルツハ此之危きと推
然るも其身をぢんぬの玉業を以て反て害を引出す道

理をねは此果亦ハ悪直へかほと彼小喻して他の品の彼
ハ益とぬるまき物を智つて大器とあるハ止——
口ルツハ亦ハ性疎しき意足らぬ故小入へ——ウヤをり
文智阿る男中して予其善性あり故信す彼が教とある
拂郎奈人ハ口ルツ事と——多きは彼が盗止る事に意持
ぬく——と飢饉のはな強敵死せんを——漸と士人
に貴も進文智の士人ハ胸を穿ち小大工土人を心服せさ
せし終るはは地手勝るとする武人をも威勢阿つて

島之の存小最ま、一らう人々之彼控の嘗て
此より教道士コロク名も此島人を教化
する事、何と一と見、彼ニエカイワ人を契律斯教
にのぶし、ある此ら等と云、然も先此土俗人編の
道と喻、事の慮、唯一途に教士導人と欲する
之予も、あふみル、古智も、裁断も、は土人を教化する
には、教道士コロク等も、も帰る、と彼に地、
て自ら、好き家を建て、少許の土地を有て、務て其土力

と起し、務て土人の志、さう事を教へ、曉して、實小今
彼甚幸福の生活をあせり、然も、彼者、此を隣
に、總て、カニハルン人備の道あり島人と云、此種、教、の、小、困、一、又、
且、次、て、起、ら、ん、と、ある、我、と、恐、る、之、予、彼、不、告、て、云、汝、と
サド、ウ、イ、ク、諸、島、の、伴、ひ、道、を、一、彼、所、の、支、那、の、行
へ、可便、何、と、一、と、勸、免、れ、と、も、彼、を、妻、あ、子、成、業、に、列、れ
め、と、決、し、終、す、多、く、は、彼、の、一、生、は、ニ、エ、カ、イ、ワ、子、で、終、る
なり、と、云、し、

ニカイワ人の如き春地愚者の音曲の感動を志を用びと
之其粗暴なるを彼ら為る音曲此如く之を同く
か—も楽しむ心なりとどしとんへき其音曲は彼等の
性と同じて其用あり下の音器をえて志は彼等の
曲も情意を和らげへ—と無理に合其を已く妻子を
教へても喜ばしと思ふぬある人如くは笛をの哀れを
了は感を動かしとぬく唯彼ら用る音器は已く勢の
強暴を激動ある物と好む方穀は不恰好ある大勢

鼓カ

者も其音ハ濁てまき成好く又好て其心老ハ多成
以て実解を打手学を語く打りすと樂と其
唱はも舞踊も同く野都—と踊は徒は弱上る
状もそもあて成るくさく此は拍を振りし動かし
前の如く手を打てて拍子をぬき唱は唯吠る如く
然る聲をなすこめりて彼等ハ嬉しとす所もやニエ
カイワ人の実よ好とする音楽を聞てめがれは感をもへ
きこりぬ

此島の数の詳なる正に知(る)べし(と)つ(て)も其大畧は考ふ
へ(る)ルツ(と)悦(ば)は(る)ターヨ(ホ)ア(山)兵八百を(と)へ(る)ホ(ー)
ム(に)一(千)人(シ)ケ(キ)テ(五)百(人)に(ウ)タイ(に)千(或)百(人)外
一(ヨ)ホ(ア)の(南)約(知)る(ホ)ツ(テ)イ(シ)ケ(ウ)ワ(並)小(キ)地(東)の(谷)
と(小)各(千)百(人)何(と)ル(ツ)此(口)數(の)算(も)意(を)以(て)
之(を)考(ふ)せ(し)し(て)其(實)數(を)知(り)て(云)ふ(所)非(ず)今(も)兵(士)
五(千)九(百)の(數)と(母)も(婦)女(小)兒(を)人(を)加(え)て(母)數(小)之(倍)
を(算)し(然)し(も)亦(也)此(數)ハ(多)か(ら)し(と)す(如)何(と)

た(れ)此(土)人(ハ)甚(産)育(少)く(又)予(ヲ)ヨ(ホ)ア(イ)シ(ケ)キ(ユ)ア
此(島)取(リ)於(て)極(む)の(人)を(と)り(事)れ(し)其(口)ル(の)算(亦)
て(總)口(數)一(万)七(千)七(百)有(ハ)總(數)一(万)八(千)有(ハ)一(口)に
ル(ツ)ガ(タ)ヨ(ホ)ア(北)兵(數)八(百)と(云)れ(ハ)之(を)三(倍)し(て)二(千)
四(百)人(有)る(所)然(し)も(予)に(云)ふ(所)ハ(八)百(一)千(許)り(て)
其(月)一(三)百(の)婦)女(あり(と)す(且)其(住)宅(も)大(抵)を
海(濱)に(在)て(歐)羅(巴)の(船)を(見)れ(は)人(と)錢(を)取(ん)を(欲)
欲(し)唯(タ)ヨ(ホ)ア(南)其(の)母(子)此(外)ハ(海)濱(に)出(來)ら(ず)

百の部——と云ふ此より由て之を考ふに只此の算ハ三分
此一過敷と思ふも此等とは信口敷僅に一万余千
とす此島周圍六千里餘ありて氣候ハ良善

且微毒もあらず此地ハ俗潔しき

亦と云く——人只此ハ甚寡少とす是其國戰爭
に止む又生人を執り——飢饉にハ婦女孀子女子此
八九輩なりと殺し食し——嫁取——と云ふ月ある此
慮外ハ人口の減るる所ハ只此の地ハ婦人の二子

を坊と最多と——大抵一子又毎子子好き者多し
由く一夫妻ハ一子ありと——歐羅巴の事無比——
て唯四か一とす

ニユカイワ人の風俗の委——きとを云ふ此を諸尼利亞
人と拂郎人とも云て之は澄明と云ふ也——お
ニユカイワ人の裁等子接するハ常ハ誠実をあらわし物と
交易するも甚正直なり常ハ先彼より椰子を裁等に
出——与て而後其代ハ錢片を清取り又裁等ハ為子新

木を伐て水桶を搬送する等の助を解して彼ら幸方
 城我子施すとかうらには海の諸島の人の盜を以て常と
 せしむ我等も我しして此土人の盜せしむる如く我等に
 對しての何時も花色預て嬉しめり客子好むを顔色
 する彼等も良性好む所なりぬ一云は云は我此に逗留する
 十日の間彼等を銃砲まで威すべきこと事は一層も何と
 きりしあるかく我等も接せしむるに我船の銃砲と
 懼是且我より彼を報る所の物と欲んと欲する為にせし

此の事ハ北緯島ノ人ニシテ其ノ性ハ良シキ事ナリト云フ

事と見えう然る時を彼も良性ありと見え誠實
 の事非は徳て如故歐羅巴人は未審此土人も於智者の考
 する之故教化せしむる或如何せん
 予南洋北緯島に於て嬉しくニカイワ人を良善と思ひ
 事ハ誠實ふあるはとあつたは記する所ハ詳ニせしめん
 予此より遙く歐羅巴の二人ハスー々此島に居て
 其土人と交するは皆能土人の性情を知る若くは二人
 ともしニカイワ人を謂ふは其強忍果敢勇猛と其男女

を撰ちて總てカンニレン南亞王利加諸島の名なり此名

を免むが其顔色の嬉色何あると云く相反して強忠

ぬきと唯波うあき所と欲する所何を以て外飾と云く

見せしものへ彼二人の歐邏巴人我等も信するニエカイワ人

の殺す於て其敵を殺すと直り其舌を断て其血を

吸む又此と其食盤子具して亦嘗味とすと云始り

此話を聞て信せぬ虚説とせしる後程彼等々話す

哉同て実子然すと云此歐邏巴の二人此地に於て互に相

互に嫌ひ互に仇とす者も何ととも土人の強忠なり

何と云ふ哉云々二人の詞等に相符合せり特ふ思ふに

敵を殺せしむに己に人肉を食ひたる此を以て他人の

豚肉に換て之を食せしむ也

程は土人の話す云首級を賣人髪を以て器械の飾り

衣什の飾り多し人首を以てし又人肉に彼等ハ

を美味とすと云如はニエカイワ人のカンニレンと云何ぞ

能く其敵を殺して其血を吸ふと云ニエウエセーテンド人

及サントイク諸島人と同一く總て南洋諸島皆然り
然も此地方此諸島人の其残忍最甚しく諸カニバー
シに過て此海の北西濱の人種の中は比すべはをまるとす
ニユカイワ人の飢饉は遙か男子已々妻子及老親を殺て
其肉を煮炙して喜んで之を食すとニユカイワの婦人の
外兄は柔和うして多量漁釣りとん事他ありと云ふ其
丈此許何まのやもう其人肉を食ふ胆も嬌らぬとあり
セブルゲ「ホステル」の説は南洋諸島の人性良和之を彼

特送^逆は自他邦北人をバ之を殺して其血を吸ふと云ふ
ホルト、アナムリア北西聖利加商船の船主武備なく
ニユカイワに上陸せしむ土人其武器なきを以て衆人集
て之を執て引て峽間へ至り之を殺さんとす諸尼利
西人此々為り甚辛苦し島民は請て幸して之を救ひ助け
しうと此を思ふに我等、北地へ送るせし同土人の柔和子
又へハ全く彼欲する所なり為りて我等報復する
事とありしを之より一も暴虐無き事なり之既我船より

拂郎素人の估計ありし時土人の漢より忽ち駭亂せし
まて察せらるる其事八篇七篇子記せり

ニユカイワ人とは人々結交の約束を為す法もなく神佛
の法もなく人倫の教もなく唯其情欲を遂ぐる外の
取為好まじ也一言云ハ人々とゆる良善の性ハ亦も阿ふ其
實子人種中北最下等とて此をウイルデン 野獸と云ふ
甚高然なりとす

「ゴウリー」人云凡國政無く文親の約束あり唯己之情

欲を縱おまはるは此の如くして人と獸との別なき人にして
人の肉を食ふ者は是人種中北最下等と一島此を「ウ
イルデン」野獸人と名くると云

甲比丹 コークリ フリーランド シカッフ ソンイテイソ 及 センドイツ
諸島の事又ホルステルの説をも考へ此洋中諸島の人
種を「ユウ」フレウウイウ此の野獸人と云ハ實を以てり
蓋是人種中の最下とすは總て此諸島をカニバルと
謂ふ一彼ニユーゼーランド「ヒデイ」ナヒガテアルメントサワツ

シンドーニ「サロモニス」サンドイク」此諸島及ロイシアデニエー
カラドニールスの諸島皆此種類なりフリーンドシカプ諸
島と甲比丹ブリクト此事並ニデントレカステアウス此往し
以來の甚を隣ビテイ「イスレス」テナヒガテウルと相同しとし
フレイテイフ諸島ハ前の諸島とは異なりて其人多和に
あそかりハ行不何し白人倫に多し此大洋中諸島
此同よし最好と一言し其人の性情を記する
者と云へしと云ふも婦人産んで自分その生児を殺

たると曾て慈悲の心なく唯己の欲を遂るのみして殘忍
を云ふはと也ホルステル謂ふアルレイ一人ハ其性理錯
明の親殺此名を豊て然とせんと思ふ此ソニイテツ人も
カンニン此種なりと守蓋其土地の豊饒を以て其人として
會歎此下なるおとに致能し捨束ありしむものれ
ホルステル云ソニイテイフ島も食人の種類ありと
ユーク及彼に伴ふ諸子等の行過せし諸島人を總てカンニ
バーレン此種類と云然其最後の行旅ハ或然せずと云ふ

茲^初ニユカイワ人を紀して其人種の如き一種の如きと云ふ
又コーク「ニユウカラドニール」故謂ふハ嘗ヨカニハレシ此類非すとす
のこゝに於て大洋中流島の人ヲ勝て其善性あるをアリ
トシドシカプ人よりも柔和ありと云へてホルステルも然りと
す然ともデントレカステアウキスーカもウ好むカニハレシ此種
と其船を危に導きき一事を歎せりラペロウセの不
幸に逢へし此等のバルバシ此所為ヲ屬せしものあり

